7月号ごあいさつ
「ロシアによるウクライナ侵攻」に思う
～ 内村鑑三　『 後世への最大遺物、デンマルク国の話 』～

株式会社 山西 あすなろ会顧問 代表取締役社長　西 垣　洋 一

現在の世界経済は、ワクチン接種により経済減退は徐々に落ち着き始めたと思われた矢先、ロシアのウクライナ侵攻によりインフレ圧力が高まり、素原材料・部品の調達制約が企業活動や消費への重しとなっています。又中国のゼロコロナ政策による都市封鎖により、企業活動が停止、サプライチェーンの分断を通して世界経済に大きな影響を及ぼしています。日本経済においても未だ収束を見せぬコロナ禍、インフレ傾向による資材・資源高や原油の高騰、円安など様々な要因が大きな影響を及ぼしており、激変する経営環境は予想し難いものとなっています。

ロシアによるウクライナ侵攻に見る－内村鑑三 『デンマルク国の話』

私はロシアによるウクライナへの軍事侵攻の状況を毎日のように見る度に、世界人類が歴史の上で同じことを繰り返していることに虚しく忍びないものであると感じると共に、学生時代に読んだ内村鑑三の「デンマルク国の話」を思い出します。

> 「デンマークが 1864 年いわゆる第二シュレスウィヒ・ホルスタン戦争の結果プロシヤとオーストリアに対しシュレスウィヒ・ホルスタインの二州を割譲させられたのち、戦敗国の戦後の経営としていかなることを行ったかという話です。その国民は戦いに破れていかに精神に破れなかったか、国民が宗教的信仰に拠って立って自然は彼らに対しいかに無限の生産力を示したか、善き宗教、善き道徳、善き精神があって国は戦争に負けてもいかに衰えなかったか、ダルガス父子の植林事業の叙述を主軸として述べられています（右図参照）。」

このデンマークの思想は SDGs が世界的に叫ばれている現在に通ずるものであり植林を通して外なる有限ではなく、内なる無限に目を向けることで自国の発展に継がることを説いています。

今の世界経済はロシアのウクライナ侵攻を起因とし、混乱と混沌の時代を迎えています。我々木材 住宅業界もまた資材・資源高、円安等のあおりを受け、市場全体の混乱が避けられない状況となっています。他方、カーボンニュートラルや SDGs 等の環境問題の高まりも我々業界がその使命の一翼を担っており、昨年 10 月には「脱炭素社会の実現に資する等のための建築物等における木材利用の促進に関する法律」が施行、従来の公共建築物だけでなく、民間建築物においても緑化推進活動を通して木造化・木質化の推進が求められています。持続可能な循環型・低炭素社会の形成を目指すためにも、『デンマルク国の話』のように内村鑑三のいう「内なる無限」に目を向ける意味でも、日本の資源で唯一、再生可能な資源である木材の利用推進が業界の発展ひいては日本の発展に継がるものと思います。

内村鑑三 『後世への最大遺物』とは

> **〝我々が五十年の生命を託したこの美しい地球、美しい国、この我々を育ててくれた山や河、我々はこれに何も遺さずに死んでしまいたくない、何かこの世に記念物を遺して逝きたい。それならば我々は何をこの世に遺して逝こうか、金か、事業か、思想か、これいずれも遺すに価値あるものである。しかし、これは何人にも遺すことのできるものではない、またこれは本当の最大の遺物ではない、それならば何人にも遺すことのできる本当の最大遺物はなんであるか、それは勇ましい高尚なる生涯である。〟**
>
> 『内村鑑三』(後世への最大遺物)

内村鑑三のいう「勇ましい高尚なる生涯」とは、大事業を興せとか、歴史上の人物になれとか、そういうことをいっているのではありません。高尚とは尊い生き方ということであり、社会のために自分がやる気になれば生涯を通して実行できることを、あとに続く人々への遺産にしろといっているのです。自分がまず始めることで、いつの日か世の中が美しくなる。そのことを「志とせよ」と教えてくれているのです。

我々木材 住宅業界においては循環型社会の形成、そしてカーボンニュートラルの実現を目指すことが内村鑑三のいう「勇ましい高尚なる生涯」であり、次世代のための「後世への最大遺物」ではないでしょうか。

2022 年 7 月吉日

後世への最大遺物　　（株）山西　西垣洋一

「デンマルク国の話」

内村鑑三著

「デンマルク国の話」は、明治四十四年(一九一一年)十月二十二日
デンマークが、一八六四年いわゆる第ニシュレスウィヒ・ホルスタイン戦争の結果プロシヤとオーストリアに対しシュレスウィヒ・ホルスタインの二州を割譲させられたのち、戦敗国の戦後の経営としていかなることを行ったか、その国民は戦いに破れていかに精神に破れなかったか、国民が宗教的信仰に拠って立って自然は彼らに対しいかに無限の生産力を示したか、善き宗教、善き道徳、善き精神があって国は戦争に負けてもいかに衰えなかったか、そういうことが、ダル・ガス父子の植林事業の叙述。
彼が「樹を植えよ」という短文を『国民新聞』に投じたことと照応。

「国を興さんと欲せば樹を植えよ、植林これ建国である。山林は木材を供し、気候を緩和し、洪水を防止し、田野を肥し、百利ありて一害なし。謂う、もし日本の山野を掩うに森林をもってすれ　ば、これより生ずる利益に由りて、民より租税を徴することなくしてその政府を維持するを得べし、と。今や日本はその親友たりし米国よりすら排斥せられて外に発展するの途は当分絶えたりというも差支なし。この時にあたって内を開発して新たに領土を増すの必要がある。そしてその方法としてもつとも容易なるは国内いたるところに存する禿山に植うるに樹をもってすることである。小なるデンマーク国はプロシャと戦いて敗れ、その領土の半を奪われしも、国内の荒地に植林して失いし以上の富を得た。臥薪嘗胆はかくのごとくに実現すべきである。この上不義不信を憤るも益はない。憤慨を有利的に現わさんがために私は挙国一致の植林を提言する。文部省はよろしく植林日(Arbor Day)を定め一年に一日、全国の小学校生徒をして、一人一本ずつの苗木を植えしむべし。これは上杉鷹山公が米沢の瘦地を化して東北第一の沃土となした方法である。われらは日本全国を緑滴る楽園に化して全世界の排斥に応ずる事ができる。製造業商業励むべしといえども忘るべからざるは農の国本たることである。そして農の本元は森林である。山に樹が茂りて国は栄ゆるのである。」